柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第95号

外国人が知っていた「日本」とは　（3）=中世（安土桃山時代）=

=====16 世紀日本を訪れた宣教師が感じた驚きの日本とは=====

今回は、ポルトガル人のイエズス会宣教師、ルイス・フロイス（1532～1597）の日本での体験を紹介しましょう。彼は 1562 年（永禄 5 年）に日本に渡来し、長崎で亡くなるまでの 35 年間の見聞をもとに「日欧文化比較」という著書を残しました。時は戦国時代の真っ只中、織田信長や豊臣秀吉にも謁見し当時の日本人の生活文化や考え方をヨーロッパと比較しながら紹介しています。

当時の人々の様子（「洛中洛外図屏風」より）

まず、最初に日本人の風貌について「ヨーロッパ人は大きな目を美しい目としている。日本人はそれを恐ろしいものと考え、涙のでる部分の閉じているのを美しいとしている」言い換えれば日本では切れ目で細い目が美しいとされていたようです。「日本人の間では痘痕（あばた=天然痘が治った後に体に残った凹状の痕）のある男女はきわめて普通である」と天然痘経験者の多いことに驚いています。また、「日本では貴人の男女の中にもハヤブサのような爪をしているものがいる」とか「男は顔に刀傷があることを誇りとし、よく治療しないので一層醜くなる」等とも記述しています。衣服については「坊主と老人以外は一般にすべて彩色した衣服を着ている」確かに「洛中洛外図屏風」等を見ると模様や色彩の派手なものが多く見られます。また、こんな記述もあります。「ヨーロッパ人の間ではハンカチは薄い布で刺繍をしたり縁飾りをしているが、日本人のものは粗布（てぬぐいの事か?）であり、他は紙である」これについては、天正遣欧少年使節（1582～1590）が南ヨーロッパに派遣された際、使節の少年が和紙で鼻をかんで路上に捨てたものを沿道の人々が奪い合ったというエピソードが残っていますが、当時から日本人は手や汗を拭くのは手ぬぐいで、鼻をかむのは紙と区別していたのでしょうか。ヨーロッパでは現在もハンカチで何度も鼻をかんでいる人が多いですね。勿論それは捨てず、また洗って使います。

紙といえば「日本では坊主や多くの王侯が袖のついた紙の着物を着る」と驚いたように記述していますが江戸時代以前から和紙に柿渋を引いた保温用の「紙子紙」はよく使用されていたようでした。

入浴については「ヨーロッパでは、全く人目を避けて家で入浴する。日本では男も女も坊主も公衆浴場で、また夜に門口で入浴する」と記述しています。日本では室町時代から公衆浴場が登場します。どうも家の門の近くでもタライに湯を入れ、行水をしていたようです。当時の履き物で気にかかる記述があります。「日本では足の半分の履き物だけで歩く」という事ですが、それは踵のない「足半（あしなか）」という草履の事だと思います。鎌倉時代頃から武士がよく使用していたようです。女性についてはこんな記述があります。「ヨーロッパの女性は香料を使い髪に香りを与えるが日本の女性はいつも塗りつける油で悪臭を放つ」「日本の女性は眉毛を一本も残さず全部毛抜で抜いてしまう」「鉄と酢を用いて口と歯を黒くする事に努める」これはお歯黒のことですね。「ヨーロッパでは財産は夫婦間で共有であるが日本では各人が自分の分を所有している。時には妻が夫に高利で貸し付ける」等と今日の日本とは随分異なっていたようです。子供の躾については「子供の懲罰は鞭で打つようなことはせず言葉によって戒める」「日本の子供の立ち居、振る舞いは完全で賞賛に値する」と絶賛しています。日本人の飲酒については「日本では吸い物を飲んだ後の椀で酒を飲むことが普通である」「日本では酒類を非常にしつこく進めあうので、ある者は嘔吐し、他の者は酔っぱらう」と、これは今日でもあまり変わらないようです。食生活では「日本人は牛を食べず家庭薬として見事に犬を食べる」韓国では体を温める料理です。「日本では腐敗した魚の臓物を酒の肴にして、大変喜ぶ」「悪臭を放つ肉や魚を躊躇することなくそれを人に贈る」これは、日本の食文化が発酵の食文化であることがこの当時には定着していることを証明しているようです。

この書物にはまだまだたくさんの興味ある記述があります。ヨーロッパ人と日本人との比較の中で、当時の日本人の生活の様子が具体的に生々しく記述されている事が大変印象的です。

（参考資料:「日欧文化比較」フロイス著）　（文:板倉敏郎）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第 65 話

小沢城（2）

小島　一也（遺稿）

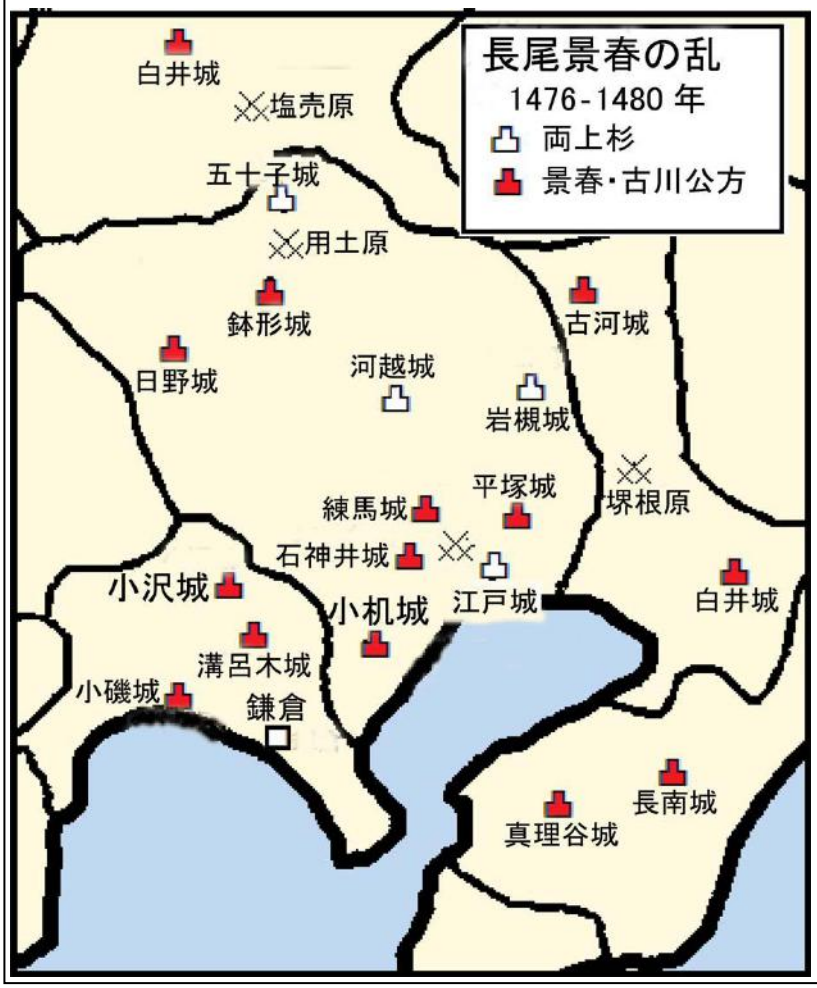
関東動乱の遠因は応永二十三年（1416）関東管領上杉禅秀が鎌倉公方足利持氏を襲ったことにありますが、今度は享徳三年（1454）公方成氏が管領憲忠を御所に招いて殺害。公方と管領の争いは深刻化、室町幕府は上杉方の願いを入れ、長禄元年（1457）伊豆に堀越公方を創立、一方、鎌倉公方は鎌倉を出て下総の古川を根拠地に古川公方と名乗り、鎌倉が関東を支配した時代は終わりました。上杉方にも文明八年（1476）管領職を求めて長尾景治の反乱があり、以降約 150 年、関東一帯が三つ巴から四つ巴の戦になります。その時期、この地方で最も戦いの憂き目にあったのが小沢城でした。

この鎌倉公方、上杉管領、そして長尾景春の抗争に最も活躍したのが有名な太田道灌でした。道灌は埼玉岩槻の地侍で時世の中で扇谷上杉家の執事（家老）となり、江戸城を築いたと言われ、長禄元年、丸子で多摩川を渡り、川崎の幸、中原を扇谷上杉の勢力下にしており、丸子の農家を訪れた道灌が「七重八重　花は咲けども山吹の　実の（蓑みの）一つだに　無きぞ悲しき」と詠んだ挿話や、加瀬山に城を築こうとしたところ、鷲に兜を持ち去られた夢で断念、夢見ヶ崎と名付けたとする故事はこの折の事とされ、現市内が争乱の中に巻き込まれていたことを物語っています。

太田道灌

この太田道灌は文明九年（1477）小沢城に長尾景春を攻めています。景春は元は道灌と同じ扇谷上杉家の重臣でしたが関東管領職を狙って主家に謀反をしたもので、その本拠地は鉢形城だったといい、北関東の同僚を集め南関東に進出すべく、関戸、矢野口で多摩川を渡り、小沢城をその前線にしていました。道灌の上杉家は裏切り者を討つべく、丸子から井田、作延、枡形を押さえて兵を進め、2回にわたって激戦を繰り返したそうで、城に籠った長尾勢は石礫（いしつぶて）で応戦、破られて敗走しますが、その際の石礫が今も発見されることがあるそうです。

このとき敗れた長尾勢は、細山、高石、万福寺、麻生と鶴見川に沿って逃亡、現横浜市港北区の小机に籠っています。それは多摩川流域は上杉勢に押さえられていたことと、当時この小机城の主は長尾景春に与していた矢野兵庫助と呼ぶ武将だったからでした。それにしても、他国の軍勢に蹂躙された小沢城は勿論のこと、この地方こそ迷惑で、被害は麻生一帯に及んだのではないでしょうか。



小机城に逃れた長尾景春を太田道灌（上杉勢）は翌文明十年（1478）城攻めしています。小机は神奈川湊から鶴見川を利用して船行の便のある水陸交通の要地（後述）で、小机城は海抜4～50m、2つの峯に分かれた堅固な城で、両軍は鶴見川をはさんで対峙すること2ヶ月、その折詠んだ道灌の狂歌が、「小机は　まずまず手習いの初めにて　いろはにほへと　ちりぢりになる」〈現資生堂の台地からと伝承〉で、その逸話の通り小机城は落城、長尾景春勢を散り散りに逃亡させています。

こうして長尾景春の乱が終了、道灌の努力で、文明十二年（1480）、長い間抗争してきた足利公方成氏と関東管領上杉家との和睦が成立、平和が訪れますがそれは束の間、文明十八年（1486）、太田道灌の死が新たな紛争を巻き起こし、再三再度小沢城は戦火に見舞われることになります。

参考文献:「川崎市史」「横浜市史」「稲城市史」「読める年表　日本史」

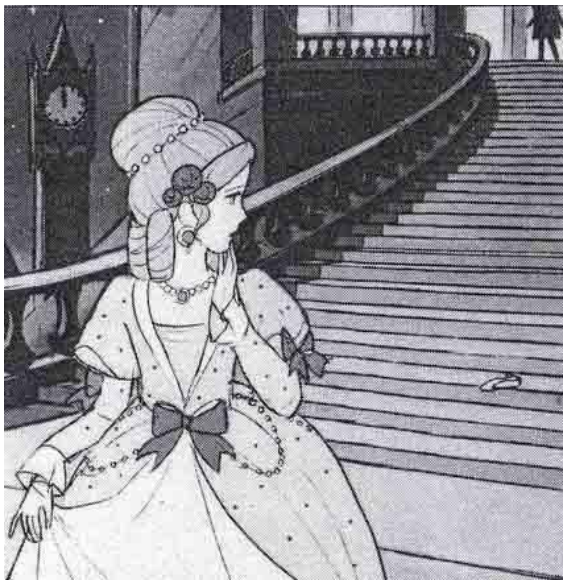
シリーズ
時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念（1）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

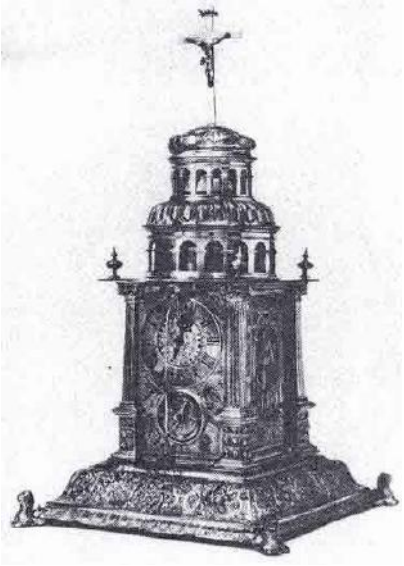
◆シンデレラと時計◆

皆さんご存知のシンデレラの物語は、17 世紀末にシャルル・ペローが当時の民話から採取した童話の一つで、これまたお馴染の「赤頭巾ちゃん」や「眠れる森の美女」といった作品と共に、1697 年に出版された『ペロー童話集』に納められています。話の筋はご存知の通りですが、シンデレラと魔法使いの交わした時間の約束が、物語の進行の上で、重要な役割を果たしています。2人の交わした約束は、深夜の 12 時を過ぎると魔法が溶けるというものでした。さてシンデレラ物語には、こういうシーンがあります。



12 時の時報で慌てて帰るシンデレラ

最初の日、シンデレラは 11 時 45 分の時計の音を聞いて、王子様とお別れします。ところが2日目になると、初日より少し慣れたのでしょう、多少の気の緩みが生じたのか、この 11 時 45 分の時を告げる音を聞きもらし、12 時の時報が鳴り始めたところで気が付き、慌てて王子様を振り切って、走って門へ向かうのですが、その際、この物語のもう一つの鍵を握る、ガラスの靴の片方を落としてしまうという、有名なシーンです。



シンデレラ時代の時計
分針はなく時針１本だけ

シンデレラは落とした片方の靴のおかげで、目出度く王子様と結ばれることになるのですが、その点は後日に譲ることにして、ここではシンデレラに時を告げた時計に注目することにしましょう。初日にシンデレラがしっかりと聞きとり、2 日目は聞きもらしてしまった時刻は 11時 45 分でした。お城の舞踏会の会場に、当時いくら高価な品だったとはいえ、柱時計を掛けておくほど、無粋なことはありません。ですからシンデレラが聞いた時を告げる時計は、家康がスペイン王フェリペ 3 世から贈られた時計と同じ、置き時計だったと考えられます。

即ち、17 世紀末の時点で、西欧世界には、定時以外に 15 分や 45 分の時を告げる精巧な時計が、既に存在していたことになります。物語の記述は、空想も含みますが、実際に体験しないことには、書けないし、想像もできないことがあるのです。実際に米国の博物館には、ドイツ製の古時計を展示しているところがあるのですが、そうした古時計についてのパンフレットの解説を見ると、一部の時計に 15 分毎と 1 時間毎に時を打つ時計が確かにあったことが、分かります。

それでは、何の必要で、15 分の時を告げる必要があったのでしょうか。この謎を解くために、ここでガリバーさんに登場していただくことにしましょう。

◆ガリバーの時計◆

ジョナサン・スイフトの『ガリバー旅行記』は、1715 年に書き始められ 1726 年に完成した作品です。空想上の国に題材を取りながら、当時のイギリス社会を風刺した作品なのですが、空想譚でありながら、出発した日付や空想上の島での日付などは、実にしっかりと記述されています。ここで取り上げるのは、小人国への漂流譚ですが、この時の旅立ちは 1699 年 5 月 4 日に、イングランド西岸の港町ブリストルを出発しています。やがてインド洋を航行中に暴風雨に遭って難破、同年 11 月 5 日に小人国へ漂着しています。ガリバーは小人国で 2 年弱の月日を過ごし、1701 年の 9 月 24 日に同国を出発、帰国の途についています。

さて、漂流中に気を失ったガリバーが、ふと気付くとそこが小人国で、ガリバー自身は身動きが出来ないように縛られて、大勢の小人たちに取り囲まれ、彼の持ち物が一つ一つ調べられているところでした。そうした持ち物の中で、小人たちが最も驚き、かつ強い関心を示したのが、上着のポケットに大切そうにしまわれていた銀の懐中時計でした。

この時計について、小人国の役人は、次のように国王に報告しています。「耳元に近づけると、あたかも水車のように、絶えず音を響かせています。おそらくこれは私たちが知らない動物か、彼らが礼拝する神ではないかと思われます。彼らの日常の行動は、この機械の作る時間に指示されていると、本人は言っております。」と。

さて、何故ガリバーは未知への航海に、懐中時計を携えていったのでしょうか。持っていた時計は1個だけ、しかも上着のポケットにしまっていたのですから、これは明らかに商品ではなく、実用品であったことが分かります。いったい何のために。実はここに、シンデレラが出会った 15 分の時を打つ置き時計の謎を解く鍵があります。　（続）

募 集

史料館古文書の会　第4弾

続　古文書輪読会（全 10 回）

2月に終了した第3回の古文書輪読会を継続する形で、第4回の輪読会を開くことに致しました。開催日は以下の通りですが、開催にあたり、新たに参加を希望される方を若干名追加で募集することに致しましたのでお知らせします。ご希望の方の参加を歓迎します。

開催日	5 月 26 日～11 月 10 日　（第2、第4木曜日　ただし8月はお休み）
時間	午前 10 時～12 時
会場	柿生郷土史料館特別展示室
進行形式	受講生同士の4人グループを作り、互いに啓発しあいながら。史料を読み進めます。史料館の数名の世話役が同席します。
参加費	資料代 1,000 円を初回に徴収します。
教材	志村家文書を中心とした旧柿生村に伝わる古文書
募集	若干名
申し込み	往復はがきに住所、氏名、連絡先を明記の上、「古文書申し込み」と記して、柿生郷土史料館（〒215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-40-1 柿生中学校内）まで、お送り下さい
問合せ先	担当　小林　基男　（電話　080-5513-5154　　044-989-0622）

柿生郷土史料館４・５月催物案内　【入場無料】

◎開館日:偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日　（原則として月4回）

4月　2・9・16・23 日（毎土曜日）　**5月**　8・22・29 日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時　（4月30日、5月15日は休館です）

第10回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展（3）
～　関東大震災と横浜・川崎　～

大正 12 年の関東大震災から 93 年を経て、震災の生の記憶が薄れてきました。そこで、当時の新聞報道から、被害の程度や対応を含めて、震災の様子を再現します。

期間: 2月27日　～　5月29日　　会場: 柿生郷土史料館特別展示室

第62回
カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ9

入門　鶴見川流域史 6　（近世編その1）
～五ヵ村用水と近辺農村～

下麻生村、早野村を流れる鶴見川を堰き止め、上・中・下の鉄村三ヵ村と大場村、市ヶ尾村の五ヵ村の水田およそ50町歩を潤した「五ヵ村用水」の成立時期と地域社会に与えた影響などについて、当時の史料からお話しいただきます。

講師:村田　公男氏　（郷土史家）

日時:4月16日（土）13:00～　　会場:柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！
ふるさと柿生の記憶を DVD 化
第１弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」
◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは史料館までお問い合わせください。